

5 mm → 6 mm → 8 mm

【人物一覧表】

山口伊織（17）（0）（5）（14）高校3年

生

山口亮平（20）（3）（8）（17）伊織の兄

山口一茂（47）（30）（35）（44）伊織

の父

山口みどり（47）（35）（44）伊織の母

警察 A

警察 B

監視員

【あらすじ】

宇都宮総合病院で生まれた山口伊織は、赤ん坊の頃、新生児室の窓ガラス越しに初めて兄の山口亮平と出会った。伊織はその時の記憶を鮮明に覚えている。

そんな二人は、小さな窓で繋がれた家で幼少期を過ごした。一枚の小さな窓が互いの生活を見守り、成長を促し、兄妹仲を育むと両親は考えていた。それに加えて、母親の山口みどりは、『兄妹であれば家族であれば何でも分かり合える』と信じる人物であつた。

しかし、伊織が中学生になる頃には、亮平は無口になり、社会や家族から距離を置く様になっていった。両親も、亮平への接し方に戸惑い、理解できずにいた。

伊織は、自身と同じ環境で育った亮平が、理解に苦しむ人物ではない、むしろ昔と変わっていないと思い、久しぶりに小さな窓を隔てて会話をする。会話の中で亮平は、伊織が自身を気にかけていることを察し、翌日から再

び学校に行くことを決意する。

伊織が高校生になったある日、恋人を初めて自宅に招くことにした。性体験が無かった伊織は、自身で避妊具を買った事がなかった為、亮平の部屋に忍び込み、避妊具を一つ拝借しようと考えた。

しかし、亮平の部屋で見つけたものは大量の避妊具と大金。驚きが冷めぬうちに、玄関のインターホンが鳴り、警察が家宅捜索に訪れる。

数日後、伊織は面会室で亮平と再会する。そこでも二人は大きな窓を隔てて会話をする。窓越しに会話をするのは二人にとって馴染みのあることだったが、年を重ねるにつれて、窓の厚みが増すにつれて、お互いの本心が分からなくなってしまうていた。

面会后、気持ちを切り替えるためにも、両親が伊織の好物である寿司を出前しようとする。しかし、伊織が寿司を好きと言っていたのは、とうの昔であった。

【本文】

○宇都宮総合病院・新生児室・中

新生児が入った大量のコット。

その中の一人に、山口伊織（0）。

枕元には伊織の名前、生年月日、身長、体重が書かれたネーム札。

伊織、大きな目を開け、目の前にある大きな窓を見つめている。

伊織の見つめる先には、山口一茂（30）と山口亮平（3）。

○同・新生児室・外

亮平、窓の先に居る伊織の姿をまじまじと見つめている。

山口、亮平に優しく語りかける。

山口「亮君、あれが伊織ちゃんだよ。ほら、手を振って、お兄ちゃんですよーって」

亮平、山口の問いかけに反応せず、窓の先をまじまじと見つめる。

○同・新生児室・中

伊織、窓の先にいる亮平を見つめる。
亮平、山口に何かを語りかけている。
伊織、亮平の口元をまじまじと見る。

伊織（５）「覚えてるよ」

○車・中

揺れる車内。

山口みどり（３５）の手元には０歳時の伊織の写真が載っているアルバム。
後部座席に座るみどりの隣には、山口伊織（５）。

みどり「ん？何が？」

伊織「伊織、この時のこと覚えてるよ」

みどり「嘘！この時まだ伊織０歳だよ」

助手席にはゲームをし、会話には目もくれない山口亮平（８）。

伊織「え、でも伊織覚えているもん。目の前に大きい窓があって、その時、お兄ちゃんがお父さんに……」

運転席に座る山口一茂（35）、伊織の会話を遮る。

山口「もうすぐ着くよー」

伊織とみどり、前方を覗き込む。

フロントガラス越しに新築の一戸建ての伊織の新たな家が見えてくる。

伊織「……あれ？」

みどり「そう、あれ」

○伊織の家・全景

駐車場に山口の車が停車する。

○同・リビング

伊織と亮平、吹き抜けの天井を見て感嘆する。

山口「（自慢げに）どうだ、いい家だろう？」

伊織「すごい！みくちゃんの家よりも大きい」

みどり、伊織が興奮している様子を、微笑んで見守る。

亮平「（淡々と）……この家いくらしたの？」

みどり「（被せるように）そんなの言う訳ないでしょ」

伊織「ねえねえ他にも見せて！」

山口「他？じゃあ、伊織の部屋見にいかうか」

伊織「うん！行く行く！」

山口とみどり、微笑んで顔を見合わせる。

○同・伊織の部屋

6 畳ほどの真っ白な室内。

伊織が勢い良く入室して来る。

伊織「これ伊織の部屋？」

遅れて、亮平、山口、みどりが入室して来る。

山口「そうだよ」

伊織「やった！じゃあ、ここをりかちゃん人形置く場所にして、あっちにシルバニアのお人形さんとか置いてもいいの？」

山口「（笑いながら）勿論。ただし、綺麗に飾るんだよ。お人形さんもその方が嬉しいと

思うよ」

伊織「（大人振りながら）そんなことはわかってるよ」

山口、伊織の態度を見て微笑む、

亮平「（見渡しながら）まー普通の部屋か」

山口「普通？壁を見てもそう言える？」

亮平「壁？」

伊織と亮平、壁に視線を向ける。

二人の先には、20cm四方の窓。

伊織「……何これ？」

みどり「いいでしょ。小ちゃい窓」

亮平「見れば、分かるよ。殴ってもいい？」

山口「やめろ！厚さ6㎝しかないんだぞ」

亮平「冗談だよ。ちなみにこの先の部屋は」

みどり「ん？お兄ちゃんの部屋よ」

亮平「は？なんでだよ。自分の部屋作った意味ねーじゃん」

山口「なんだ、良いじゃないか。お互いの顔も見れるし、親からすれば安心安心」

亮平「それが嫌だっつうんだよ。ねー、母さ

ん、交換しようよ。家帰ったら、すぐ宿題
するから」

みどり「わがまま言わないの、すぐに慣れる
わよ。それに……」

みどり、伊織と亮平の顔を見つめる。

伊織と亮平、みどりの顔を見上げる。

みどりの声「兄妹だから、考えていることく
らいお見通しでしょ？」

伊織と亮平、顔を見合わせる。

伊織「……ゲームの続きやりたいんでしょ」

亮平「（少し驚きながら）……うっせ」

亮平、伊織の側から去っていく。

伊織、微笑む。

○同・伊織の部屋（夜）

電気が点いた室内。

小窓が設置された壁にベッドが横づけ
られている。

そのベッドにて就寝中の伊織。

小窓の奥には、亮平が寝転がる姿。

亮平、伊織の寝る姿を確認する。その後、ベッドから立ち上がる。

ドアが開く音。

数秒後、電気が消え真っ暗になる。

○伊織の家・伊織の部屋（夜）

真っ暗な部屋に明かりが点く。

小窓の奥には小さなカーテンが設置されており、亮平の部屋の様子が確認できない。

制服姿の山口伊織（14）が携帯で電話をしながら、ベッドに腰を掛ける。

伊織「でね、こないだみくと話したんだけど。

……そう、那須サファリパークとかどう？」

みどりの声「（大声で）伊織、ご飯！」

伊織「（大声で）分かった！（声を抑えながら）
ごめん、今からご飯だから」

みどりの声「（大声で）伊織、お兄ちゃんも！」

伊織「（大声で）分かったから！（声を抑えながら）
じゃあね、また。……はい」

伊織、電話を切り、小窓をノックする。

伊織「お兄ちゃん、ご飯」

伊織の問いかけに反応はない。

○同・亮平の部屋（夜）

電気が点いていない室内。

山口亮平（１７）、ＰＣを操作している。

亮平、投稿サイトに『はじめまして』と入力する。

亮平の目は死んでいる。

○同・ダイニング（夜）

伊織、山口一茂（４４）、山口みどり（４

４）が、食卓を囲んでいる。

みどり「ちゃんとお兄ちゃん呼んでくれた？」

伊織「呼んだよ、反応はなかったけど」

みどり「それ、呼んだうちにはいないわよ。

ったく」

みどり、離席し、亮平を呼びに行く。

山口、ご飯を口に運びつつ、ため息を

吐く。

山口「……あいつはもう駄目だな。よう分かんらん」

伊織「……親なのによくそんなこと言えるね」

山口「……親だから言えるんだよ。……はー、全部分かってたんだけどな、昔は。あの時が恋しい」

伊織「（独り言で）……全部ね」

山口「ん？なんて？」

伊織「ううん、なんも」

伊織、ご飯を口に運ぶ。

○同・伊織の部屋（夜）

真っ暗な部屋。

ベッドにパジャマ姿で寝転がっている

伊織、小窓をノックする。

亮平の声「……何？」

○同・亮平の部屋（夜）

真っ暗な部屋。

ベッドに寝転がっている亮平。

○同・伊織の部屋（夜）

伊織「……お兄ちゃんの好きな食べ物は何？」

亮平の声「……ごめんけど寝るよ」

伊織「なんでよ、久しぶりに話そうよ」

亮平の声「……ポークピカタ」

伊織「（微笑みながら）……だと思った。変わってないんだね」

亮平の声「それだけだよ」

伊織「じゃー伊織の好きな食べ物は？」

亮平の声「……桜でんぶ？」

伊織「……惜しい。今はジェノベーゼ」

亮平の声「……ませたな」

伊織「（微笑しながら）どこだよ」

伊織「じゃー好きな色は何？」

亮平の声「ブラウン」

伊織「好きな映画は何？」

亮平の声「マネーボール」

伊織「え！ポケモンの劇場版じゃないの？」

亮平の声「それ、いつの話だよ」

沈黙が流れる。

伊織「学校嫌なの？」

亮平の声「……嫌じゃない、安心して」

伊織、腑におちない表情をし、小窓を見つめる。

○同・ダイニング（朝）

伊織、山口、みどりが食卓を囲んでいる。

亮平が階段を降りる音。

山口とみどり、不思議そうな表情をする。

制服を着た亮平がダイニングに入ってくる。

山口とみどり、驚き、目を合わせる。

亮平「……何？」

○同・玄関（朝）

亮平、玄関から出て行く。

○同・ダイニング（朝）

山口とみどり、口をぽかんと開けている。

壁掛けの鳩時計が鳴く音。

みどり、時計の鳴る音にハツとし、伊織に向かって、

みどり「もうこんな時間！伊織、あんたも早く出なさいよ！」

伊織「（うんざりする様に）わかってるよー」

○道

学生バックを持ち歩いている亮平。

立ち止まり、一度背後を振り返る。そ

の後、眉間に皺を寄せ、俯く。

前を向き、再び歩き出す。

○伊織の家・玄関（朝）

伊織、玄関から出て行く。

伊織「いってきまーす」

みどりの声「気をつけてね」

○伊織の家・玄関（夕）

山口伊織（17）、玄関へ入って来る。

○同・ダイニング（朝）

伊織、机の上のメモを見る。

メモには『今日遅くなるからご飯3合炊いていてね』。

伊織、メモを見た後、笑顔で部屋を出て行く。

○同・伊織の部屋（夕）

伊織、部屋を片付けながら、通話をしている。

伊織「そう。……多分夜までは帰ってこないから。……うん、待ってるね、気をつけて」

伊織、通話を切り、生理の周期が記入されているカレンダーアプリを見る。

その後、検索エンジンで『コンドーム

女子が用意する』と検索を掛ける。

伊織「（独り言で）……あるに越したことは無いよね」

伊織、自身の所持金を確認する。

しばらく硬直する。その後、何かを思い出した表情を浮かべる。

○同・亮平の部屋（夕）

伊織、亮平の部屋に入室する。

伊織「（小声で）お邪魔しまーす」

伊織、静かに部屋の中を探る。小窓が設置されている対面の壁に棚が置かれているのを見つける。

伊織、一度合掌し、棚を開ける。

伊織、静かに驚愕する。

同時に、インターホンの鳴る音。

伊織、事態を飲み込めず、その場で右往左往する。

伊織、嗚咽しそうになり、手で口を抑える。

再びインターホンの鳴る音。

伊織、口元を拭いながら、玄関に駆け足で向かう。

○同・玄関（夕）

玄関前に移動してきた伊織。

混乱しながらも髪を手櫛で整え、扉を開ける。

扉の先にはスーツ姿の警察 A と警察 B。

警察 A「山口亮平さんのご家族の方ですか？」

伊織「言葉が出ない様子」……」

警察 A「売春斡旋の容疑で逮捕状が出てますので、捜査のご協力お願いします」

○同・亮平の部屋（夕）

棚の中には大量のコンドームと大量の万札。

玄関から伊織の嗚咽する声が聞こえて来る。

○宇都宮警察署・全景

○同・待合室

伊織、山口一茂（47）、山口みどり（47）、暗い顔をして、座っている。
伊織、少し痩せこけた表情。

○同・廊下

警察職員に先導されながら、面会室に向かう伊織。

○同・面会室

椅子に座り、亮平の到着を待っている伊織。
目の前にあるアクリル板に目をやる。
伊織、扉をノックする様にアクリル板を2度叩く。
扉が開き、面会室に山口亮平（20）と監視員が入って来る。
椅子に座った亮平は俯いたままであり、

話出そうとしない。

伊織「（呆れた様に）何したの？」

亮平、顔を上げる。

亮平「……見ての通り。世間的に良く無いことをした」

伊織「……なんで？」

亮平「……ごめん、そう言うのあんま言ったらいけないらしいから、今は」

伊織「……そっか」

亮平、顔を上げ、目の前にあるアクリル板に目を向け、少し微笑む。

亮平「凶悪犯罪者みたいな扱われ方だよね」

亮平、扉をノックする様にアクリル板を2度叩く。

監視員「触らないで下さい」

亮平、申し訳無さそうな表情を見せる。

亮平「厚さ8mmらしいよ」

伊織「ん？」

亮平「このアクリル板、厚さが8mm。家にいる時よりもさ、ここに居る時の方が、会話

ができているって不思議だよね」

伊織「……まー穴が開いているからね」

伊織、通声穴を指差す。

亮平「（少し微笑み）確かに、盲点だった。そりやー声も通るか」

沈黙が流れる。

伊織「……ねえ、お兄ちゃん」

亮平「何？」

伊織「好きな食べ物は何？」

亮平、監視員の表情を伺う。

監視員は表情を変えない。

亮平「……変わらずポークピカタ」

伊織「……好きな色は？」

亮平「……俺は、昔と何ら変わってないよ」

伊織「ごめん、でも本心に聞こえなくて」

亮平、伊織の発言を聞き、少し微笑む。

○伊織の家・ダイニング（夜）

暗い表情をした伊織、山口、みどりが帰宅する。

山口、一度大きく息を吐く。

山口「……こう言う時こそ、前を向かなきゃな」

みどり、山口の発言を自分に言い聞かせるために、大きく何度も頷く。

みどり「そうね、今日は何か美味しい物でも食べて。ねえ、明日からまた頑張ろう」

伊織、ソファに座る。目を開きながら思案顔を浮かべている。

山口の声「そうだな、寿司とかどうだ？」

みどりの声「いいわね。それだったら、出前で桶を頼むのと合わせて、伊織が好きなちらし寿司も頼みましょう」

伊織、変わらず思案顔を浮かべ、山口とみどりの会話が耳に入っていない様子。

山口の声「伊織！」

伊織、山口の声の方向を向く。

山口「今日、ちらし寿司でもいいか？」

伊織「（不思議そうに）なんで？」

みどり「なんでって、伊織好きでしょ？ ちらし寿司」

伊織、数秒間フリーズした後、頷きながら納得した表情を見せる。

伊織「あー。……あのね、ちらし寿司はね、今はあまり好きじゃないよ」

伊織、少し悲しそうな表情を浮かべる。

（了）